

りまでだばやったでねえげあ。中学校までいがねあ、小学校、2～3年のあだりだべな。小学な。うん、小学校や。

(小学校2～3年頃まで)がどもる(思う)な。昭和20年前だな。20年前つうごどだな。」「サルケ焚ぐのやめだず中学校終わってがら、まだ中学校のあだりサルケ焚いであらな。終戦…後だぎゃあやめだず、終戦後も焚いであだぎゃあ、焚いでらんと気もするなあ。』

定義・分布・質 ▼「ホントのもんどのサルケ(本当の、元のサルケ)」「炭化の進んだサルケのことか)は堅く、沼地のカヤなどが腐ってできた軟らかいもの(年代の比較的新しいもの)とは区別された。前者がよいサラケであり、火のつきも燃え具合もよかった。——「うんうんうん。(火が容易に)つぐ。うん、燃えるって、いい、ツヂのいいどごだあサルケのいいどごだば、ホカホカとなる、んにゃいぐねひてもある程度ボカボカなるあて、うん。そのどごころによってツヂ堅いってへばいがホントのもんどのサルケだば、なんてすだば、この、もど、こごあだりあれだべ沼地であつたどごで、なんだばカヤとかそういうやづが腐って、けつきよぐやつたいど、もどがらのツヂど、な、区別さな、その点はうん。」

入手法 ▼柴田のサラケを売り買いした話は聞いていない。サラケを買うくらいの人であれば、木を買って焚いただらうとD氏は言う。——「うっとすたやあらごどだあねへてあただ買いに來る、か…ねえべえ。買うだけの人だばやばり木焚いでえあでねえぎああ。がどもるな。」

採取の時期・場所・主体 ▼田から掘る場合には、掘ったあとに続けてその田で稲作をおこなう都合上、春先に採取した。掘ったあとには、山から持ってきた赤土や黒土を客土して埋めた。サラケヤヂから掘る場合には、採取する時期は限定されなかった。たいいていの人であれば、サルケを採取するためのヤヂを持っていたが、D氏の家では持っていなかったため、田の下から採取したのだという。——「サルケはが、春でねぎゃあ。春掘って、田んぼの場合はな。その専門の、掘るどご、専門のあるわけさ。サラケヤヂだつてな。それあいつでもいばたて、田んぼの場合は、田んぼつぐねあまねどごで、春早ぐ、だづごどな。まあ、ほとんど…このぬまつ(沼地)だでばな。それ掘る…だはんてな、サラケはな。」「うん。オレエ(私の家)でだば田んぼがらも掘った。(田から掘り、その掘った田でつづけて稲作も)そうそうそうそうそう。それ埋めでしさ。うー。ツヂ入れで。ツヂは結局山がらだでばの。アガ土もあるし、黒もあるしさ。さままだべさ。なあアガも黒も。アガツヂづごどは粘土ツヂが。んだね。うん。」「まあたいでいあのそれその専門のヤヅあるんだはんてな。うん。それまあホント、オレンでだばそのヤヅねへてあたはんて、田んぼ切つてその、下切つたんだばつて。」

▼サラケを切つたのは父親だった。D氏はまだ小学校2～3年生だったので手伝いをさせられたことはなかった。——「(サラケを掘つたのは)親。(自分は)テツダイしねでえあ。まだちせくて、まだ小学校2～3年あだりだあテツダイもなまねべえ。」

採取法 ▼サラケの層に達するまで約3尺の表土を除き、その下のサルケの層をあわせると5尺ほどの深さまで掘った。掘る専用の道具があつたが名前はいふ思い出せないという。——「ま、掘るていつおうサルケまでツツとって、そのあどがらこう、サルケあら切るあれあるがな、ちやと、道具な。うん。なーんてしたでな。なーんてした。本家さ行けば切つた道具あるでねがなあ。××(個人名)どさ行つてきた?サルケ切る道具あるべ。こ、これ、こう、こうなつてな。んだんだんだ。(自分は)××の弟や。うお、(すでに)そごで聞だだば(自分の話よりもよくわかつたでしょう。」「たげ深く掘つたでねえげあ。5シャグ…1メートル50ぐれえだば、掘つてるべ。んだねなあ。もどサルケ焚いだもんだねな。(その掘り場所で、遊んだりしたことは)うう、遊ぶてまあ、たんだ…、こごもほんだナンボもほねでサラケだ。3ジャグ、3ジャグまず1メートル掘ればサラケだな。うん。こごも。」

およそ一尺四方、厚さはその半分くらいにサルケの塊を切り出した。——「1シャグ角ぐれえだぎえあ。で、厚さなあ…厚さだば1シャグでねなあ。干しねあまねどごで、あちさはその半分ぐれえであつたぎえあ。1シャグぐれえだなあ。あの、本家であの、いわゆるサラケ切つたその、器具だでばな、1シャグぐれえの幅コでねえげあそれ。まあ、1シャグねえが、んま、25センチが30センチはあるがな。」

用途 ▼シボドでサラケを焚いた。昭和20年以降、正確な時期は忘れたが、時代が下るとストーブの燃料としてもサラケを用いた。——「もつろんシボドでねあまいね。うん。してそれがら、たげ、こうストーブあつてきてストーブさも、やあくべだんた感じすなあ。ま、ストブなんてストブがらこだマギなたはんてな。昭和20年頃までだばサルケ焚いであつたんた気すなあ。」「ストーブ始めだのは戦後だどごで、2……んだなあ。20年以降だでばの。何年だつたべがなわがねぐなつてまた、ま、20年(よりも)後だな。20年だば終戦のどぎだべ。カマやつたどぎ。そのあだり、ストーブ…そのあだりもサルケ焚いだんた気するなあ。ストーブさサラケ焚いだりしたもなあ。」



サラケ採掘跡(畑地)左の田よりも一段低くなっている

▼いっぽう、炊事にはワラを用いた。サルケは火力がないからだという。また、学校へ持参する握り飯はサルケの火で焼いたものだった。マキストーブになってからは、ストーブで炊事をおこなった。燃料については覚えていないが、ストーブでもサルケを燃やしたので、サルケで炊飯した可能性もある。——「(炊飯は) うん、ナベで炊いた。カギノハナでな。ナベで。焚ぎものは、マギでねぐワラな。(炊飯は) ワラで。サルケ、サルケその、アツ(火力) ねもの。ヴァーヴァど燃えねば。ケッキョグ、あのその、しぐ、さ、飯なねまねもだどごで、アツな。」「うん。ケッキョグおらガッコさ飯もてあつたずアレあんだもなあ。サルケさこう、やたもだもなあ。握り飯だばな。」「(ストーブになってからの炊事は) ストーブさかげであでねげあ。ストーブで飯炊いだもるなあ。ストブさなればこだ、うーそうなってがらもマギなつたどごでな。うん。」

操作 ▼ワラを下に敷き、小切りにしたサルケを置いて火をつけた。良いサルケは火のつきもよく、ホカホカと暖かかった。よくないサルケはなかなか火の付きも、燃え具合もよくなかった。訪問客のあるときにはサルケを足してくべたが、木と違って、すぐには火がつかなかった。——「サルケさあの…ワラこう、敷いでな、それさ。サルケじがでなぐ、ワラ、ワラを敷いでそれさ。(火はよくつきますか)「うんうんうん。つぐ。うん、燃えるって、いい、ツヂのいいどごだあサルケのいいどごだば、ホカホカどなる、んにやいぐねひてもある程度ポカポカなるあて、うん。そのどごろによってツヂ堅いってへばいがホントのもんどのサルケだば、なんてすだば、この、もど、こごあたりあれだべ沼地であつたどごで、なんだばカヤとかさういうやづが腐って、けっきよぐやつたいど、もどがらのツヂど、な、区別さな、その点はうん。」「たんで、まあ誰が遊びに来たてへば、こんだ、このサルケ切た、こう、くせえ、こめぐ切るだんでしさな、それを切るんだはんでこう、ま、オキヤグ来たずわけでこう、シくべるばて、ちよっくらどシつがねでばな。木ど違ってサルケだどごで。はあ……。ホントになあ。サルケなあ……。」

副産物 ▼着火時の煙が特にひどく、まわりが見えないほどだった。一度火がついてしまえばそうでもなかったが、目を悪くする原因になった。土臭い、木とはまったく異なるニオイがしたが、それで困ったことはなかった。——「煙しんでえもんだ！うん、最初こう、シ(火) やるのこうやればや、煙、なもめねぐるもんだもの。マナゴだば(笑)。いべ燃えでまればな、シつでまれば、うう、それがらまだなも目悪ぐしねもだな。」「サルケのカマリだどごで、どんだつてへばいあ……つー、つづくせえってのあ何て、何て……木どあ全然つがう…。ニオイで困ったどごあねえな。煙でだあ、まあむつたどごだあ。それごそホントに、葉っぱねばホントに、ふふふ(笑)。うん。だどごでこう、燃え際がな。うん。」(2016年8月27日取材)

⑤E氏 昭和9年生(84歳) 男性

人物 ▼昭和9年に当地で生まれた。父親は明治36年生まれである。5～6年ほど前までは60年ほど前に採取したサルケを捨てずにいたという。納屋にはテンテギ(サルケ掘りの道具)を保管している。

呼称 ▼サルケと称した。

使用年代 ▼E氏が子どものころから戦後まではサルケが使用されていた。——「ムガシな。いや実際オラも子どもだづぎチヂオヤサルケ切つてな。」「オラサルケ焚いだのは、16～5ま、までであつたべがな。今より64～5から4年前、60年前までだば、サルケ焚いだべ。うん。(戦後まで) あつたあつたあつた。」

定義・分布・質 ▼サルケは表層から20～30cmほどの地下にあり、黄色味がかっているという。当地のサルケが優品であるとされるのは、木の枝が入っていて良く燃えるからだという。E氏によると、大昔、この地域に津波が来て、流されたり倒されたりした木が土に埋まり、サルケになったのだという。地下を掘れば今も昔の大木が埋まっているという。——「やばり(柴田のサルケが) いいつどごは木の枝どかさういうよげはいちゅどごで、燃えるだでばな。そのサルケでもあまり燃えね場所もあたらしい。」「して、実際さ、この部落の西側の苗代あたりあつたどご下にそのサルケがあるわけ。サルケてあの、むがし、大むがしこう津波来てさ。タイモク(大木)とか木とかさういうもの、まず流されてさ。その上さツヂ被さつて、それサルケつてしたの。したどごで、実際あの、オラオラ見だばつて、掘つてみればこつたタイモクだのつてまだのつてるわけさ。うん。して今圃場整備してみな田んぼになつたけども、もど原野つてあのヤヂ、カヤとかさういうものを、いっばいおがつて場所だつたわけさ。それみな自分の土地持つてる人が、上のツヂ大体、20cmがら30cmぐらいこう取れば、その下にあの、ツヂの色つてこう少し黄色味した、あのそれが出でくるサルケで。しこし黄色味した。それナガ見ればムガシの木倒れだ枝とが、こたタイモクとか色々混ざつてるわけや。」「今でもオラ田んぼ少し深く掘ればサルケ出で来るよ。うん。色こう黄色味したさ。うん。黄色つて、黄色つてすばつてこうえつたまあ、こうえんた色な、なんぼかこう普通の表土と違って色変わつて。」

入手法 ▼柴田のサルケは優品なので、往時は△△方面の、××集落や○○集落からの需要もあつた(筆者注：利害関係を含む内容のため地名を伏せる)。E氏の父親の場合、××集落の人からサルケが産出する土地(原野)を譲つてもらふみかえりに、そこから採取したサルケの一部を××集落の人へ提供するという約束のもと、何十年間もサルケを切つては届けた。ところが昭和47年に圃場が整備されて³⁵⁾、いざ登記が問題となったとき、単なる口約束であ

ったために権利を主張できず、結局、もとの持ち主の土地（田）になってしまった。圃場整備前は、単なる原野がまさか田になるとは夢にも思わなかったという。現在も田は譲られることなく、××集落の人が稲作をおこなっているという。——「うん、それは△△方面（地域名）とかさ。アヂのほうから買いに来た。」「売りにつてあの、△△のさ、△△のあこあたり、××（集落名）とか、〇〇（集落名）あの辺の人だちが、親戚を通じてオラサもとにきたわけさ。貰いに来たわけさ。うん。いやオラだちもその時だば、そういうサルケ採る場所ねしてあったわけさ。したどごで、そういう□□（集落名）とが△△のフトだちが、こちさその土地もてあたどごで『この土地アングさやるはんで、サルケ切つて、ワアさけでけれ』と。そういう話もあった。いや、したはんでさ、それも『ける』、言葉で『ける』、オエでもあたわけさ。オエのチヂオヤがさ。あっこに今圃場整備したはんでわがねばつて、いっぺあったわけさ。サルケあたどご。そて□□の△△の、××（集落名）のふとの土地だどごで、来て、『オエさサルケ切てければこの土地けるはんで、アングのものだつたわけや。そして何十年もサルケ切て持てたわけさ。さあ、圃場整備して、オエのオトサン死んで、こんだ登記の問題だつきゃ、なも登記なつてねわけさな。ただコドバで、『ける』『もらる』つて。そういうことであつたわけさ。したはんで結果的に圃場整備ささつたどごでその、オラのもんでなぐ、△△（地域名）のもの、そのフトのものになつてまたわけさ。まだその土地田んぼなつて柏の人来てつてくるわけさ。まさか、ああいう原野てこの辺の原野て、人もこう行がいねんた場所であつたどごで、田んぼなるずどごは夢にも思わねであつたわけな。それ47年の圃場整備で、全部田んぼなつたわけさ。」「（その場所は）今だきゃなも全然わがらねね。その△△（地域名）の田んぼてすばつて、廃簿なつたづぎその場所さ行がねで、ベヅだどさいてまちゆどごで、オラでも分がねもの今。うん。（柴田の）西側。今その道路あるべ。道路（県道186号）のこつがわ。うんうん。（原野というのは）ヤヂ。うん。」「（現金での売り買いは）そうねえな。けつきよぐ、親戚が通じて持つてつたり。土地借りだり、土地のかわりに持つてつたり。」

採取の目的 ▼言及なし

採取の時期・場所・主体 ▼サルケを切るのはE氏の父親であつた。——「ムガシな。いや実際オラも子どもだづぎチヂオヤ サルケ切つてな。」



テンテキの使い方（E氏）

採取法 ▼表土を15~20cm、または20~30cmほど取り去ると、少し黄色味がかったサルケがあらわれた。それをテンテキという道具で30×40cm、厚さ20cmほどの大きさに掘り採つた。——「上のツヂ大体、20cmがら30cmぐらいこう取れば、その下にあの、ツヂの色つてこう少し黄色味した、あのそれが出でくるサルケで。しこし黄色味した。それナガ見ればムガシの木倒れた枝とが、こたタイモクとか色々混ざつてゐるわけや。それを、ムガシの人こう、きた道具もあるであ。見せるが。それをこれぐれの（30cm×40cm、厚さは20cm）大きさに切つてさ。そしてあの、その場所さ、乾かしてそして馬ではごんで。最初あのやつたづぎあかなり大きいばつて、乾げばこう小さくなつていぐのさ。」「結局靴なんもあるわけでねし、このままはて、こういう具合にこう切つて、こう切つて、こうふばて、そして、で、（道具を）けでやつてもいんだ。使うんだば。」「うん、あの名前『テンテキ』だ。」「結局こういう場所をさ、最初こういう具合に表土こんきぐらい、15~20cmぐらいこう剥げば、そのサルケが出でくるわけさ。それをこんだあの、（げふ、げふ、と咳こむ） こういう具合にして、こうい具合にして、こて、こうやつてこうやつて、こうやつてでそて、まず取るわけだであな。で、こう入れで、こう、へばそつからこうサルケ出でくるわけさ。それ上にあげで、だいたい大きさこれぐらいに大きさ切つて、乾がすわけさ。」

▼サルケを切る場所は決まつており、前の年に切り取つた場所が一段低く列状になつてゐるので、それに續けて一列を掘り採つた。水びたしになつてゐる中で掘り採るため、テンテキで切り取られたサルケは浮かぶように離れた。それを取り上げてから、カマ状の道具で四角形に切つた。葉子を切るような調子だつたという。——「毎年切つて採つてゐるもんだどごでさ、こごまでとてちよんど、採にいぐなつてゐるわけさ。段になつて。いま採るづはこういう具合にへでさ。ワだば切たやたどねだオエのチヂオヤやたづワ見だどごあるこうやつてさ。そへばこの水のながさ浮かんでくるわけさ。浮かぶわけねけども、人でこうやれば軽ぐ水のナガだはんで軽ぐ上さ上がつてくるわけさ。それをこんだそのオガにこさあげで、それはカマみたもんでさ。あの、カマつてすより、何だべ。うん。曲がつた

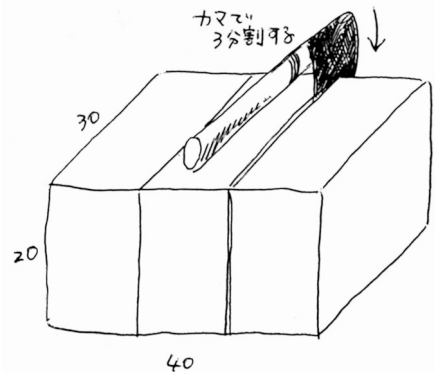


図6

んたそれでシカグにこう、お菓子切るだけえにこう切るわけさ。うん。」

乾燥・運搬・保管 ▼サルケは軽量ブロックほどの大きさにして、風が入るように間隔をあけて互い違いにレンガ積みした。乾燥したのちは、馬で運び、家のそばの小屋に保管した。乾燥すると、サルケは小さくなった。——「そして、あの乾がすにさ、これサルケだどへばさ、これぐらいにして、こうやってな。互い違いにして、風はるようにして、そして乾がして、そしてウヂまではごんだであな。そてはごんでも、えのながさへらいねどごで小屋あってさ、こやのナガにそのサルケへで」「その場所さ、乾かしてそして馬ではごんで。最初あのやったづぎあかなり大きいばって、乾げばこう小さくなっていくのさ。」

▼乾燥させているサルケを父と一緒にひっくり返し、再び積み重ねる作業をおこなったその夜、B29が来襲した。青森空襲である。昭和20年7月28日にE氏父子が「まぎがえし」をおこなっていたことを示す証言である。この日、爆撃機の編隊は秋田県男鹿半島を北上して旧西津軽郡岩崎村付近から青森市内を目指して東北方向に向かっている。

▼乾燥したサルケは、6～7年ほど前まで捨てるに捨てられず、保管していた。惜しいという気持ちが少なからずあったのだろう。——「青森空襲、B29来たづぎ、ワドチヂオヤどちょうどそのサルケま、サルケを乾がすにまぎがえしてらづぎ、の晩にB29きちゅんだはんでな。その頃あサルケ焚いでるだであな。晩に空襲来ただでばな。うん。今、もう6～7年めだば、サルケ、あただねな。うん。とておいであてなげるになれらいねし。」

用途 ▼ロブヂでの採暖に用いた。

操作 ▼朝、サルケに火をつけようとしても容易でなかった。2～3本ばかりのマキを置き、その上にサルケを盛り上げて、火をつけて暖を採った。このあたりは山がないので、マキは貴重だったという。マキは西海岸方面から売りに来たようだ。また、リヤカーに発動機付きの丸鋸を載せて「マキを切らないか」と村々を巡回する行商もいた。丸太を切る作業は頼み、マサカリを使って自分たちで割った。——「サルケ朝まにサルケってまどもに火つがねもんだごでさ、マギってながなが買えねどごでさ、少しマギ買ってさ。火つけるようにして、そのマギの上さ、サルケをこう、やって、ま、あだった、まずあったがくしたでばな。」「マギは買ったの。こご山ねどごで。山ねどごで木なもオガねもの。そのあたりブラグで、マギこう、まず売（う）に来るわけさ。一軒一軒こう。そのマギどいしょに、下さマギ入れて、2～3本入れて、サルケを盛りにして、そへばものすごぐマギの火力で、サルケさ火つて」「や、（マギ売りは）深浦あたりがら持て来たんでねえが。うん。」「（マギとして使ったのは）小枝もんだしあの、（買う場合には）こえんた木をこう割った…割ってもてきたわけではなぐこちゃ来てがらわだち割るわけさ。太い木。そしてさ、そのマギ売（う）に来る人もあるし、まだあの、発動機さ丸ノゴつけでさ、木きてけるふともあたわけや。うん。リヤカささ、ノゴ（丸鋸）ど発動機つけでさ。こう、見て『今日マギきらへねな』てばづ、へばワだち道具ねどごで切れねどごでその人をお願いしてさ。切れれば割るんだばワだちでマサカリでこう、やったんだけども」

▼小屋から運んだサルケは、ナタで小切りしてから焚いた。E氏によると、サルケには「目」があるという。それは木の柾目のようなもので、目に沿って縦にナタを入れるときれいに切れるが、目に対して直角に、横にナタを入れようとすると、粉々に砕けてしまう。——「サルケにも全部あの、タデとかヨゴとかあるもんだよ。マギでもんだべ。丸いものがこう割れるべ。ヨゴがら割る気なても割れねべ。サルケも、あの、こう切ったの、ムガシあナダでこうやってこえぐれにしてで、ロブツさ焚いだもんだでばな。だんでサルケあの、サルケをちちやぐすに、まず、マギの目どふとつで、うん、つがうんだ。ヨゴがら割る気なても割えねだ。こうサルケあれば、こうこう、目ついであるんで割れるばって、これをこうやってこうやる気なてもコナコナなって割えねだ。」「（サルケを小屋から）ウツさそのまま持ってきて、夜ロブツさ焚ぐに、こうナタでこうちきって、そしてで下さしこし木焚いでその上さ。」

副産物 ▼梅雨入りのころ湿気が多くなると、冬のあいだにクズヤネの天井に着いたススが水滴となって垂れてきた。それを防ぐためにカヤやワラで編んだコモを天井に張ってしのいだ。——「けっきょくあのあたりクズヤネづぎサルケ焚いで冬はなんともなふてこう入梅さなって入るようになればダラダラとたって来るわけさ。うん。じめじめしてな。それを防止するために、こんだあの、カヤあるべ。カヤこうあれ、そのあたりビニールってそうねもんだごで、カヤ編んだりして、上さこう張ってさ、それ垂らねよにしてさ。家のナガもう真っ黒だもの。おぎやくさん来たりじぶだち座っても、上がらおぢねえようにして、それさ、藁で編んだコモとかさ。」

（2017年6月18日、11月28日取材）

⑥ F氏 昭和2年生(91歳) 女性

来歴 ▼昭和2年に生まれ、20歳（数え年）の時、上古川（柏村）から当地へ嫁いだ。F氏は現在88歳。耳が遠いので補聴器なしでは通じない。家のそばにある小さな畑で作業中だったため補聴器は付けておらず、詳しい話を聞くことができなかったが、筆談で尋ねると、以下のことがらを話して下さった。

呼称 ▼サルケ、サルコ、サルガなどと発音した。サルコという呼称は『津軽見聞記』に見られる。「さることいふ物あり土にあらざ木にあらざ落葉又は芝草のかたまりたる如く朽かたまりて黒き物なり（以下略）」。方言のバリエ

ーションのひとつかもしれない。

使用年代 ▼F氏が当地へ嫁いだのは昭和20年代の前半であり、その頃にはサルケが使用されていた。しかしその後使用されなくなった。——「オラ来てがら全然、こ、な一、なんね。こちゃ来て50何年もなばって、見んだごどあね。来た近所だばあてあた。」「今全然ねえ。見んだごどね。ごんじゅねんがらなるばって、来た近所だばあてあた。来て。今だば全然ね。」「ワ50年も60年もなものこちゃ来てがら。来た近所はあてあたけども、今全然。田んぼなてまたもの。うん。全然見だごどね。田んぼになてまたもの。」

定義・分布・質 ▼F氏にサルケについて聞きたいと尋ねたら「ここは柴田だからか」と問い返された。往時は柴田といえばサルケ、柴田のサルケは優品だといわれ、他村の人々はみな、柴田のサルケを求めに来たという。サルケはカヤヤヂに広がっていたが、現在はほとんど田になってしまったという。——「ふ一んサルケ、こご柴田だはんで。きだごどあね。50年もなるばてえ。ムガシだば柴田のサルケいって言ってあつたばってサルケあるどごずつとヤチさ行つてカヤあるどごさ行げば、サルガきたどぎサルケとたもんだもの。今なもしよゆごどね。ガツパど田んぼにひまって起ごひまって。カヤさおじカヤさ。カヤあつて、それさサルケ（あつて）。」「シバダ（柴田）のサルケてみな



柴田集落

買に来たもんだもの。カヤ今なもねぐなてまたもの。田んぼなてまで。今なんもそういうサルケづごつたばねえ。見んだごどね。」

入手法 ▼当地では自給的にカヤヤヂから採取したいっぽう、他村の人々は、柴田にサルケを買いに来た。

採取法・乾燥・運搬・保管 ▼F氏が嫁いだ昭和20年代なかばころは、カヤヤヂが多く、そこからサルケを四角形に採取し、干しておいたという。——「こシガクに採つて干ひおいで、やたもんだつて、てこう、カヤあて、それがらサルコこうシガクにとて干ひておいで来た近所（当時）だば、カヤいっぺあつてそがらシガクに、て干ひておいで。」（2017年6月18日取材）

⑦ G氏 昭和10年生(83歳) 女性

来歴 ▼越水で生まれ、19歳のときに当地へ嫁いだ。

呼称 ▼サラケと称した。「柴田さるけ」という類いの呼称については知らない。

使用年代 ▼当地に嫁いでから10年くらい本家に仕えていた。仕えていた間はシボドで使っていたように思う。本家を出てからは使っていない。——「サラケ！うーん。サラケ。昔うんうん。（サルケを売り買いたという）わがねそれだば。全然わがね。トシいったふとだばおべでるがもしらねえよ。オラダヂだばわがね。サラケだばオラつきやな、あのアイ（あれ）だづぎだばあの、まず、くべだであムガシこう、な。今だばストップ（ストーブ）だやあゆやあでねぐサラケ焚いだもんだはんで。したばてそのサラケのそれまでだばわがね。トシいたふとだば覚えじゆでねがあ。」

定義・分布・質 ▼自らが生まれ育った越水は「山どご」なのでサラケは焚かず、柴を焚いた。——「（柴田では）焚いだんたなあ。アラだば馬いだエだばサラケ焚いだごどあねず。オイのエでだば。こごでだば焚いだんたあべだよ。そえでおべであたあ。（越水は）山どごだ。んだんだんだ。木ある。したんでサラケ焚いだずわがらねずう。うん。んだんだ山いっぺあるつきや。木拾つての。木焚いだはんで。うん。」「うーん。したはんで（越水では）サラケ焚いでね。こさ来てがらサラケ焚いだづわがらつづ。まず、おつきいシ、オラだばシボドだつて、うん。」

入手法 ▼採取した。売買の話は知らない。

採取の時期・場所・主体 ▼バイパスのそばにヤヂがあり、田になっている場所がヤヂであった。焼き場のあるあたりの後方が、柴田のサルケを採っていた場所だったと聞いている。ヤヂからサルケを採取した。田から切ったという話は知らない。——「こごでだば（一般的には）サラケ焚いだ（と思う）。こごヤぢいぺあるきや。う、こごでなぐ、田んぼがヤヂであったわけ。それが今田んぼにひてまてるきや。うん。したはんでらあ。わがねでばの。」「今そのサラケきたどご田になてまてらはで、んだんだ。今ガツパど田だ。」「むがしヤヂでさ。カヤいっぺおえで、そごでまづサラケきたオラきや来てがらサラケきたべがの。わがねた気すだい…うん。サラケ切てそれごどこんだあの区画整理なつたつきやあ。それでガツパ田なてまたみただね。」

用途 ▼シボドで燃料として用いた。炊飯の際にサルケを用いたかどうかは不確かである。

操作 ▼シボドで木を少し燃やし、その上にサラケを被せるようにして焚いた。煙が出た。——「それ（シボド）さ

あの木わんつか入れてサラケかぶへで焚いだづそれだば覚えであだ。うん。何でそれ今調べでらの。」

（2017年6月18日、11月28日取材）

⑧ H氏 昭和25年生(68歳) 女性

来歴・人物 ▼H氏の母親は柴田の農家出身で、E氏（柴田⑤）とは親戚である。H氏一家は父の仕事の関係で□□県に移住し、Hは5歳になるまで□□（県名）で育った。その後、当地へ戻った。H氏は母方の祖父（明治36年生まれ）が採掘している様子を、子どものころに遊びがてらに見ている。——「おの母親が××がら出だ人で、今の××どキョウダイだ。そして、〇〇、木造さ、の〇〇って人ど結婚したんだばってな。二人とも、こさまだ、シバダ（柴田）さ来て暮らしたんだ。」「サルケ掘ったっていうのはうちのヒイジッチャ、孫じっちゃん（夫人の母の父、明治36年生まれ）だのも掘ったりしたごどあるけども。うん。それ聞ぐんだばあそごの角の右のエあるでばな。あすこさいげば、あそごがオエの（母の）実家だはんで。（使った道具など）オラそういうのだばわがねけどさ」「オエのチヂオヤの親だばもどもどキツグリ（木造）で百姓して。あの大きい百姓ではながったはんでの。うん。□□県のほうさ行がさったんだでばの。」

呼称 ▼サラケ、サルケと称した。

使用年代 ▼H氏が□□県からこちらへ戻ってきた昭和30年頃もサルケが採取されていた。——「ただ掘って、な。そういうのは見だごどはあるはんでサルケサルケってさ。キオグにはあるけど、何しろあれオラだぢナンボのときだべな。小学校いちねんせい頃だべが。オラも五歳ぐらいまで□□県にいだったごどでさ。あの、うちの父親が（勤務先）で□□にいだったごどでさ。あの、ウツさこっちのほうさ5年ぐらい。（昭和30年頃に現地へ来た、その頃も）んだな。掘ってだ。掘ってだ。」

定義・分布・質 ▼中の川の向こう側、弥生田、布引方面のヤチにサラケがあった。今は圃場整備されて田になっている。

入手法 ▼自家用に採取している様子を見たことはあるが、売買については幼少時のことで分からない。——「（サラケを買いに来たという類の話は）わがねなあ。そういう込み入った話だば。」

採取の目的 ▼言及なし

採取の時期・場所・主体 ▼気候が温暖になってから、6月頃から掘ったのではないかとH氏は考えている。——「時期はなあ。あすこは田んぼにしてねどごだ、今だば田んぼになってまたばってサラケ専門のどごだはんでまずな（つ）、春、ぐっとあつたがく6月頃から掘ったもんでねべがしてずっと乾がしておいだもんでねべが。て冬のほら、暖房のアレだでばの。うん。」

▼中の川の橋の向こう側、弥生田、布引方面の、湿地から掘った。現在は圃場整備されているが、以前は湿地が広がっており、Hの表現を借りれば「サラケ専門の場所」があった。H氏が採掘の時期を6月頃と考えるのも、稲作とは無関係な原野であったことが根拠のひとつである。——「オラ覚えでるんだば今そごあちずっと川（中の川）の橋の向こう、あの辺、弥生田、布引（ヌノビギ）なってるべ。布引がらもつとむご（北のほう）だはんでオアだばヤチヤチってしたもんだけどさ。うん。Eさんもその場所今田んぼつくちやどごあるよ。今あ区画整理して全部田んぼなっちゃったはんでの。うん。だけどさ。」

▼サルケを採取したのは、主にH氏の母方の祖父であった。H氏が手伝いをするということもなかった。——「サルケ掘ったっていうのはウチのヒイジッチャ、孫ジッチャだのも掘ったりしたごどあるけども。」「やあ、見でるんだらうけど、な。ジイサマがよぐ掘ったもんだごどでな。」「そういうの（手伝い）はやらねがったな。サラケの場合とはぐに。うん。まあ、あんまりそばさほら近寄らないようにってケッキョグがわり遊んだりしたけども。」

採取法 ▼使用した道具については分からないが、一辺が20cmほどの立方体に切り取っていたと記憶している。——「そごきれーにこう掘って、このくらい大きさに切って、全部こう積み重ねで、干すんだもんだって。うーんと、かなりおっきいな。20かける20（cm）くらいでねべが。うん。厚さも。うん。正方形で。うんそえんた感じでき。キオグある。」

乾燥・運搬・保管 ▼レンガのように交互にほとんど間隔を開けずにびっちり積み重ねた。列状に重ねるといよりは、数列まとめて一つの塊のように面状に重ねた。——「びっちり。うん。あまり（間隔を）開げねんでさ。ピッチどこう積んでさ。こう、交互にな。重なるように。積んだもんだ。一列でね（一列ではない）。なんぼがこう幅広く倒れねえように、転ばないように飛ばないように、った感じだったな。ぱつと（細長い列ではなく塊のように）きれいにさ。こういんた感じのさ。ちよんどこうな。2つ2つずつこう置いていってその間さまだこう置いていって。こうずつとさ。うん。やったもんだった感じだなあ。」「こう重ねて。レンガみたいに。こう重ねて。2つ置いてまんながさ1つとさ。うん。やった感じできこうずらしてさ。ずっと積み重ねで、乾いだころにウチさ持ってきてホラ。あの、焚いだんだでばの。イロリさの。」

▼この証言が正しいとすれば、サラケの積み重ね方は、線状に並べる場合と、面状に並べる場合の、2通りがあったことになる。筆者の調べでは、秋田県横手地方でも同様の2通りの方法があった（右写真は参考）。



線状に重ねる（参考写真）

用途 ▼H氏が□□県から当地へ戻った昭和30年代はじめ頃は、H家ではサラケを使用しておらず、マキストーブだった。すでに周囲でもマキストーブを使っている家は何軒もある時代であったし、また他所から移り住んだH家にはサラケを入手するための土地もなかった。マキは購入したり採取したりしたものを割って積んでおいた。いっぽう、サラケを使っている家もあった。座敷の中央にイロリがあり、ツルベを下げて鍋をかけ、煮炊きをしていたという。——「ウチ（H家）では焚がねがったね。うん。オイでだばイロリとがそういうものねがったはんで、30年でもマキストーブはあったじゃな。うん。マキストーブ。マギ燃したの。サラケはあぐまでもさ、マキストーブとがそういうのでなくてイロリささ、こう炭みたいな感じでおごして使ったもんだよ。うん。ウチではあどがら来たカマドで、すたサラケも採るような場所もねし。まあそういうウチも何軒もあったけどね。サラケでなくてマギのウチもね。オラがこちさ来たころだばの。その前はどうか分らないけども。オラ来た頃だば、イロリあってサラケ焚いでるエってばホントのくずやの、ね、ムガシのイロリ座敷のまんながこうあってれ、ツルベこう下げでうん。あの、下さサラケ燃やしてナンベかげで。うん。モノ煮だりしたもんだじゃな。」「持って来るっていうよりかホラ、あのそちこちの木を伐採したり枝払ったり、買うのも買ったがも知らない。でマギワリやってで今度はあのずっとまいで置ぐんだじゃない（家）のウチのいま、こう屋根こかげる程度にして。」



面状に重ねる（参考写真）

▼H家ではカマド状の器具にツバガマをのせ、マキで炊飯した。H家が□□県に住んでいたころ、母は社員寮の炊事をまかされていたので、カマドで大量の飯を炊くことに慣れていた。当地へ移住してからも、電気釜が発売されるまではカマドで炊飯していた。電気釜はH氏が小学校3年生のころ（昭和35年ころ）に購入した。母親は体が弱いうえに、家事をこなしながら着物の仕立ての内職をしたり、H家で徐々に拡大しつつあった稲作の手伝いをしたり、忙しい生活がたたって寝込むこともあった。そのような時にはH氏が炊事をおこなった。学校から走って帰り、電気釜にスイッチを入れるのが日課だった。——「ご飯はツバガマ。あのカマ。あの、こういうあづいフタつだあのよぐダッシュ村（筆者注：テレビ番組のタイトル名）だのあいうのさ入るべき、うん。カマドがあって。カマド置いて、カマドみたいなもの置いて、ウチではカマドっていうだいいそれたもんでもねしてあったばて、それに似だよなものさ、マキをくべでうん。でご飯炊いだ。」「□□県にいたときだば、オエの母親、ログ人も七人もワガイ人だち、〇〇〇（勤務先の部署名）の事務、ワだち事務所の、そごさ住宅さ入ったもんだどごで、そごに住み込みでいる、ほら。オドゴの人だちさご飯作ったんだでばな。だどごでおっきいカマドさご飯炊いだもんだだよ。あつつにいだころでもね。□□県ね。うん。ま一步出れば山だはんで、木はなんぼでもあったし、そえた感じでウチ（木造）さ来てがらだばの。ウチさ来てがらもしたはんで電気釜出るまでだばむたど（カマドで）炊いだべたて。ガスが出た頃はガスで今度炊いだり。」「電気釜がさ、小学校……何年生ごろだべなあ。3年生…3年生ごろから使ったがもわがねえ。おらあのオエの母親忙しい人だったどごで、いつも時間なれば、放課後ウチさ走って来て、ご飯のスイッチ入れてったの。うん。学校がら走って来てね。そうそう。したはんで何でもやらへらいだどごでさ。母親カラダ弱いうちに上に今度よそ様の和裁でさ、縫い物したった仕立でものしたったどごでさ。そのぢだんだんにうちのチヂオヤもそれがら今度こちら来てがら今度田んぼも少しずつ増やして行ってナンボがこう田んぼさもこんだ手伝わねばまねぐなつたべ。こんだ母親ホント忙しい人だったどごで結局寝込んでまれば寝込んでまってそえば朝から起ごされでご飯支度とかさ。サラケは焚いだどごとあねえだね。うん。」

操作 副産物 ▼H氏は、サラケはイロリで炭のように火をおこして使用するもので、マキストーブでは使用しないと考えている。

その他 ▼子どものころ、祖父とともにサラケの採掘現場に行き、走り回って遊んだ。サラケを掘った跡は深く、子どもたちの間では『ソゴナシヌマ』（底なし沼）と呼ばれていた。親からは、落ちると危ないから近寄らないようにと言われていた。——「オラ子どものどぎだどごで。よぐ掘ってる場所さ、あのかだつて行ったりしてあれ遊んだキオグあるどごでの。うん。うんその場所でな。いや子どもだどごでただ走り回ったりして。だけどもほらサラケ掘ったあどさ行けば落ちればふけはんでどのこのってだばしゃべらえだキオグだばある。」「まあ、あんまりそばさほら